

【講演記録／「東亜同文書院の45年、愛知大学の70年」浜松講演・展示会】

近衛家と東亜同文書院、そして愛知大学

愛知大学名誉教授、元愛知大学東亜同文書院大学記念センター長 藤田 佳久

(2017年7月11日、クリエート浜松)

1. はじめに

ただいまご紹介いただきました、愛知大学名誉教授、元センター長の藤田と申します。どうぞよろしくお願いたします。

今日のテーマは「近衛家と東亜同文書院、そして愛知大学」というタイトルであります。こういう展示・講演会は東京、横浜、名古屋、京都、広島、福岡、シカゴ、などの大都市あるいは、東亜同文書院に関係した弘前、富山、長崎、熊本、那覇など17カ所で、これまでいろいろやってまいりました。それぞれちよつと特徴を出しながらやってまいりました。今回のチラシ(図1)の下は、近衛家の書であります。この近衛家が本学とどのような形で関わっているのか、いうところが私のテーマの特徴であります。



図2 大学キャンパス模型(左上)とセンター内部

にくいかもしれませんがその一番下のところに、白塗りの建物が愛知大学東亜同文書院大学記念センターが入っている記念館でありまして、昔の第15師団の司令部の建物であります。その辺りのところに、昭和天皇が、皇太子時代に、ここへ来られたときの記念碑と植樹された松があります。道の反対側には久邇宮の碑と植樹された松があります(図2、上の中央と右)。15師団の師団長として皇室がここへ来たのは初めてなんですけど、その久邇宮の碑であります。これは久邇宮御一家の写真で、テラスにおられる娘さんが良子さんです(図3)『愛大公館100年物語』より。

この久邇宮の師団長在任中に良子さまが昭和天皇のおきさきに決定したという報道がありまして、その時代、豊橋にお祝いのフィーバーがあったわけでありまして。道路を隔てて、そのお2人の碑が並んでいるのです。しばらく歩くと本館の正面があつて、これが今、われわれも入っています東亜同文書院の記念センターです。大学としては大学記念館、いう

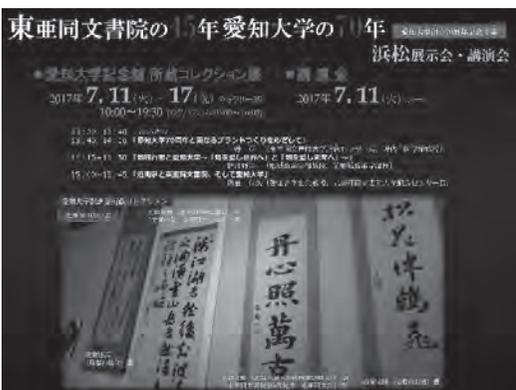


図1 浜松展示・講演会用ポスター

2. 愛知大学東亜同文書院大学の紹介

まずはわれわれの記念センターの紹介です。図2の一番左上は模型です。ちょっと分かり



図3 久邇宮殿下邦彦王一家。右から2人目が久邇宮殿下。前列左から2人目が良子女王

ことになってまして。内も外も、もうほんとにレトロです。外壁面はドイツ風であったり、下のほうのレンガがイギリス風であったり、中に入りますとこういう、ちょっと彫刻があったりして、ギリシャローマ風な建物で、豊橋では最初の洋風建築であります(図2、下3枚の写真)。宮大工や大工の人たちが総動員で1年間で作ってしまったという建物であります。この建物には通し柱がありません。1階の上に2階が載ってるんです。結構、今はそういう建物が見られないんですけど、これまでの110年間に伊勢湾台風とか東南海地震とか三河地震にも耐えてきた建物でありまして、こういう建築法は、今日、もう1回見直したら、それなりに価値があるのかなという気がいたします。これは内部の、天井の高い廊下と部屋で、落ち着いた感じの建物です。

この展示施設の展示物は、今回もだいぶ浜松のこの会場に持ってきたものですから隙間だらけですけど(図4、上)、こういうようなぜいたくな空間の展示です。下の写真は、いろんな見学者のシーンです。これは中国からの研究者のグループですが、日本の研究者、から欧米の研究者や学生、台湾とか中国から修学旅行生。もちろん、うちの学生諸君の入門ゼミの説明会とか、中学生が色々な学校から来たりとか、とにかく多彩な団体が来ます。最近ではJR さわやかウォーキングのコースに



図4 東亜同文書院記念センターへの参観者

も選ばれ、2年続けて2,000人ぐらいの人たちがやってきたり。普通の日でも結構、遠隔地からお客さんが来るようになりまして、記念センターの名前が大分知られるようになったのじゃないかなと思っております。

その中に、いろんな書院の展示品がありますが、東亜同文書院以外のもう一つの目玉は、書院と関係しますが、書院の卒業生である山田良政とその弟、純三郎で孫文の秘書役としてつかえたことによる孫文関係の展示です。その孫文の秘書役をやったときに多くの資料が集まった。弘前出身の兄、山田良政が、南京にできた南京同文書院の職員であったときに、東京で孫文と出会ってオーラを感じ、孫文派になってしまったのです。孫文があとで一斉蜂起を呼び掛けたときに馳せ参じて、戦死してしまっただけです。孫文はその後、革命が成功したあと、この良政をたたえて、慰霊祭を催し、揮毫を書いたのです。孫文は字を書くのが好きで、これは一つの募金活動でも



図5 山田良政(円内)と純三郎・孫文

あったと思います (図 5)。

その良政の弟さんが、この写真のうち孫文の左側の純三郎です。実質的に孫文の秘書をやったわけです。そのときに多くの資料が集まって。その息子さんが順造さんで、書院を卒業されて、お父さんのそういう資料をベースにして孫文図書館を作ろうとしたのです。しかし、晩年になって体を悪くされて、もうできないということで愛知大学へ一括寄贈していただいたのです。今回、この3階の展示室のほうに、その一部を展示していますので、この講演会が終わりましたら、あるいは明日から1週間展示を開催していますので、ぜひ、ご覧になっていただきたいと思います。書院と、この孫文関係、そして次は戦後の愛知大学史ですね。そのあたりが中心の展示で、力を入れています。大学の記念センターでは、今後、卒業生で画家の平松礼二さんとか東松照明さんの写真等の作品も展示するという予定が進行しております。それは秋以降の話であります。

その書院関係の最初のところで、近衛家の4代の書が掲げられています (図 6、7、8)。この画像の写りが悪いですけれども、一番左側が近衛篤磨のおじいさん忠熙の書であります。近衛篤磨公は小さいときにお父さんを亡くしてしまい、そのためにおじいさんが近衛公を育てたのですね。それから、この右側、近衛篤磨公の書であります。漢文調で書いてありますけれども、湖を渡って振り返ると、なんと波が荒れていたことか、また山に登って振り返ってみると、なんと急峻な山だったんだろうかと。そういうようなことを書いてあります (図 6)。これは文磨さんの書です (図 8)。篤磨公の息子さんです。戦争中の総理大臣であります。それから、こちらは、シベリアに抑留されて亡くなってしまった文磨の息子の文隆さんです (図 8、左)。文磨さんの長男の揮毫で、端正ですが、やわらかな文字ですね。



図 6 近衛篤磨と近衛家 4 代の書



図 7 近衛忠熙 (左) と篤磨 (右) の書



図 8 近衛文磨 (右) と息子文隆 (左) の書

これはおじいさんの忠熙の書です (図 7、左)。春の野に出たら、霞が非常にかかっている中で鶯の鳴き声のみ聞こえるというような風景を詠んだものです。こちらは近衛篤磨公の書です (図 7、右)。ここに、いくつか地名がみられます。松江は上海のウ・スンってところにあります。そこの辺りの川を詠んだ秋の景色です。2 行目行きますと、少年とは年が若い子ですかね。若い子ではあるけれども才能が非常に豊かであって、崑崙 (コンロン) の一番高いピークのような形だという意味です。

これらの書の原文は、ご自身で全部作ったわけではなくて、「酔古堂劔掃」という本の中から取ったものが、ほとんどであります (図 9)。「酔古堂劔掃」っていうのは、これはのちにこういう名前が付けたようですね。



図9 引用された書籍の表紙

も、明の時代に、いろんな人生の役に立つ名言が集められて出版された書物です。肝心の明、あるいは、それ以降の中国では、ほとんどやらなかった。日本では江戸時代に、これがもたらされて、幕末から明治のころ、爆発的とはいうまでもないのですが、文人の間で非常に広がった書物です。全 10 巻あります。日本の古書店、古本屋で調べますと 10 万円していました。非常に高い値段なんですけれども、その中でご自分の気持ちに合う名文を、こういう形で揮毫にして掲げたということで、ご自分の一つの思いが、ああいう書の中に込められてるんだろうというふうに思われます。

3. 各地で行ってきた展示・講演会

これらの展示会では、いろんな人にも講演者として来ていただきました。これ、アンパンマンのマンガ家であるやなせたかしさんです。これは福岡の講演会のときの様子であります(図 10)。やなせさんはこの頃、体が悪くて、だいぶ心配したのでありますけれど。



図10 やなせたかし氏の講演風景(福岡)

東京から飛行機で福岡へ来ていただいて、再び飛行機で、すぐ帰っていただいたのです。アンパンマンがどういうふうな形でエネルギーを与えてくれたのか、というようなお話をさせていただきました。約 200 人ぐらいの人に聞いていただいたのですが、なんと初めて知ったのですけれど、この方、歌を歌われたのですね。4 曲ぐらい歌っていただいたのです。

次の写真の、右の縦下 2 枚は、愛知大学東京事務所移転、開設記念の時に、事務所も入っている霞山(篤磨公の雅号)ビルでの展示会と講演会の様子です(図 11)。もともと東京事務所は東亜同文書院卒業生の会「滬友会」とともに、この霞ヶ関の霞山ビルの中にあって、その霞山ビルが壊されて文部省のとなりにつインタワーができて、その 37 階に引っ越したのです。その記念で、記念センターが展示会をやったということなのです。船戸与一という作家が『満州国演義』でしたね、本を書かれて、第 1 冊が出た直後だったので、非常に沢山の人が集まりましたのですね。左上のほうは、こういう展示会の準備中の風景であります。今日、3 階で見させていただきますと、こんな工程があつて展示を進めてきたということが、おわかりいただけると思います。

そういう方々には、講演していただいた内容を記念センターでブックレットとして出版していただいています。左のほうのブックレットは先ほどの『満州国演義』見る中国大陸』



図11 東京・霞山会での船戸与一氏の講演風景



図12 船戸氏と安彦氏の講演ブックレット

のテーマで船戸与一さんの作品。右のほうは漫画で描こうとした中山優中心の大陸での日本青年の物語で、安彦さんの作品ですが、安彦さんはガンダムの絵を描いている方です。随分、この本はヒットして販売されました(図12)。

このように、全国各地でこういう展示会をやってまいりました。これまで17カ所です。それぞれ、こういうチラシを作って。あるいはポスターを作って展示をしてまいりました。そのうちの一部であります。右のほうの図はそのチラシです(図13)。開催地は全国各地の、書院と色々な由緒ある土地を選びました。一番下は弘前のチラシです。弘前は先ほどの山田良政の出身地です。福岡とか長崎、この辺は書院の入学生が非常に多い県です。今回は特に理由があってではないんですけど、今まで名古屋以外は東海の地でやったことがありませんでしたので、ここ浜松でやらせていただいたということでもあります。



図13 記念センターの各地での展示・講演用ポスター(一部)



図14 近衛篤磨公(30代頃)

4. 近衛篤磨公のヨーロッパ留学

改めて、何度も同じような写真が出てきますけれど、これは近衛篤磨公であります。この方は残念ながら早く亡くなってしまいます。これは、30代のころだと思います。体の立派な方であります。その後の文隆さん等を見ていますと、ちょっとイメージが違うのですけれども。この方は小学校へ入る前から、家庭で修行しますが、小学校時代、英語塾で勉強をした。その英語の先生が授業をやる前に相撲をいつもとっていたと。相撲をやることによって体力をつくった、というような記録が残っています。30代のこのころですけれど、今で言うと、やっぱり肥満であるということに非常に気にしていて、なるべく散歩をするとか甘いものを控えるとか、体には非常に気を遣っていたようでもあります。

家系図であります(図15)。一番右上のほうまで行きますと、ちょっと読みにくいのですが、藤原釜足までさかのぼることができます。途中で近衛というのがポジションになり、それによって近衛という名前に変わります。だけど、本名と言いますか、もともと



図15 近衛家の系図（写真は篤磨と文麿）

の姓は、藤原ということになっています。この歴代の多くの方々はともかくとして、これが一番最後の方で、先ほど言いました。忠熙さんで、おじいさんであります。それから、その息子さんが、篤磨公の父ですけど、残念ながら早く亡くなってしまいうわけですね。今度は左が篤磨さんです。その下が子の文麿さん。その息子さんの文隆さんと通隆さんです。

とくに書院設立にからんだ篤磨公の写真を探していたのですが、これが一番いいかなということでもう出させてもらいました（図16）。一番右上から、少年時代です。もう、このころ英語を勉強していた。だから語学力は結構あったのです。それから真ん中が青年時代で、これが明治の21年と書いてありますから、ドイツへ留学した頃です。こちらは貴族院の議長をやっていたころの写真です。左下は、2度目にヨーロッパへ行ったときの写真であります。これ以降は、もう亡くなってしまって、画像が存在していません。

近衛さんの非常に特徴的なことは、明治18年4月から23年の9月までの留学です。『近衛篤磨日記』に書かれていますけれども、やっぱり英語をやったせいか、ヨーロッパへ留学したい、と政府へ願ひ出る。そして最終的



図16 近衛篤磨各時代の人物像

にオーストリアに決まります。プリントの後ろのほうに、そのコース図を載せておきましたので、それもご覧になって下さい（図17）。当時は船旅であります。パナマ運河を通ってフランスのマルセイユ。そこからパリへ行って、ボン。そこから、イエナです。この辺りで、今で言うとなんでしょう？ホームステイですかね。そういうことをされて、ドイツ語を学び、やがてボンへ戻ってボンの大学に入ります。そしてライプチヒ大学へ行くわけですけど、最初はボン大学で勉強しようと思っていたのですが、彼が記した『近衛篤磨日記』によれば、ボン大学は当時のドイツで言うとアッパークラスというのですか、貴族階層の子どもたちばかりが集まっています。もう勉強せずに遊んでばかりいるので、最初は憧れて来たボン大学だったのですが、こういう中では自分は勉強できないであろうということで、日本の本部に連絡を取りライプチヒ大学に行ったのです。ライプチヒ大学



図17 第1回ヨーロッパ留学へのコース

は日本で言うと京都大学みたいなところなのです。古い都の中にある大学でありまして、こちらはボン大学と比べるとかなり研究、教育が熱心であるので、ライプチヒ大学に決めたというわけです。留学年数は合計6年にも及ぶわけですが、そこへたどり着くまでに、数年かかっているわけです。

そこで何をやったかという、卒業論文の研究作成ですが、当時の卒業論文は、今で言うと博士号クラスのレベルで、その学位論文を書いた。タイトルは『国務大臣責任論』と言います。この原文を見たいというわけで、私は国会図書館にアプローチをして、そこに1冊だけ、もうボロボロですが残っているのを見つけました。残念ながらコピーが取れないのです。そこで私も、少し写してみたりしたのです。

この学位論文には近衛篤磨公が、どなたかに寄贈しているサインが記されています。ということは、つまり印刷・製本版になって何冊かもらって帰国をされたのでしょうか。そのうちのどなたかに寄贈した1冊が国会図書館に所蔵されていました。目次を見ると、日本のことが書いてあるのです。政治体制史。一番最初は貴族社会における一種の、大ざっぱに言うと法体制というものですかね。お役人の役割とか。その次が封建時代。江戸時代のあたりです。明治以降は絶対主義時代と書いてありました。だから、その3つの時代の中で日本の、こういうトップクラスの人たちが、どのような責任を果たしていたのか、果たしてこなかったのか、ということを実証的に展開しています。一番最後の次に第二部がありまして、そこでは出来つつある日本国憲法。明治憲法ですね。明治憲法の中でも国務大臣は責任を持たないというようなことを、どういう形で明らかにしていったらいいのか、というような、ちょっと応用問題でしょうか。そういうようなことに触れた論文です。全部、独学のドイツ語で書かれています。

ドイツ語はドイツ行ってから初めて勉強した。先ほどのイェナはライカのカメラ生産で有名なところ。そこでのホームステイのときにドイツ語を勉強して、ボン大学、それからライプチヒでも勉強して、ドイツ語で学位論文が書けるようになったのです。そういう非常に志というか志向性が高いレベルで、留学されたのです。彼は小学校は卒業していますけれど、次のステップの学校へ行ったときに体を悪くして、ずーっと休学していたのです。学校では勉強ができなかったのです。けど英語だけはやってた。一通り英語を学び、あるレベルまで来たときにアメリカかイギリスへ留学したいと政府筋に相談した。そうしたら三条実美が反対したのです。当時、明治政府のトップたちはかなり反対したそうです。その理由は、アメリカかイギリスへ行ってもらって、いわゆる今流に言うと、民主主義的な精神を勉強してきて、自由民権運動に加わるなど、それを日本に流布されては困るというようなことを言われたのです。しばらくは留学話は中断したのですけれども、先ほどの英語塾の先生も含めて応援があり、オーストリアやドイツ（プロシア）は皇帝の国であり、明治政府の国体に似ているということで、そこへ行くならというわけで許されて行ったのです。この学位論文のスタイルや内容を見ますと、ドイツ流の観念論的などというよりは、一番政府が嫌っていたイギリス流の実証主義的な側面で学位論文を書いている、というところに篤磨らしさがみられます。

こういうような形でヨーロッパで勉強をして、その途中でパリ、それからロンドン、さらにスイスでは、ヨーロッパアルプスの山々を踏破しているんです。そのときは自分の弟さんたちも留学に呼んで、一緒に登ったりしているのです。あと、ほかの大学や歴史的な場所にも非常に関心があった。そういうヨーロッパの旅行を通して、この近衛さんの基本的なものの考え方を形成したという気がい

たします。

5. 荒尾精と日清貿易研究所

一方、そうしている時期に今度は荒尾精の話です。荒尾精は尾張藩の武士の息子でありましたけれども、明治維新になって父親が失業して東京へ出てきて荒物屋の商売をやりまします。けれども、失敗してしまふ。そこを麹町の警察署長に救われて、書生になって、初めて当時、問題になっていた朝鮮半島とその背景にある清国という世界を知って、目が切り開かれていくわけですがけれども、その過程の中で、どうしても清国へ行きたいと思うようになります。とくに朝鮮の背後でコントロールしている清国ってどんな国であろうかということに非常に興味を持ち、それと情報として入ってくる清国の情報。そういう中で清と日本がどう付き合ったらいいのかみたいなことを現地で観察したい、いうわけです。しかし1人で行っても、そう簡単には入れない国です。すでにそのときに、上海に入っていました岸田吟香を訪ねるのです。彼は岡山県、美作の国の出身ですが、細かいことは省きますが、この人が目を悪くして、横浜に来て開業していたへボンへ訪ねていったら1週間で目が治った。非常に感激するわけです。それに、この岸田吟香は、武士ではありませんたけれども、いろいろ幕府に狙われたりして脱藩をされると言いますか、武士を辞め、いろいろな職業を経験するわけです。その彼が知っている、いろいろな言葉が、へボンが編集中の和英辞典に全部使えるというわけで、へボンは彼をかわいがって日本語のコレクションの材料にするわけです。日本語をほぼ編集して、活字にするというときに、日本には印刷所がありませんでしたから、上海へ連れて行った。そこで彼は自由人としても振る舞って、上海人から、ものすごく人気を得るわけでありまします。その彼がやがて日本へ帰ってきて、日本最初の新聞を発行したり、蒸気機関



図 18 岸田吟香（青年、晩年）と愛大のロゴ

の会社を作ったり、社会事業をやったりとか新聞記者になったりとか、もうありとあらゆる仕事をやった後、もう1回上海へ行って、へボンから目でみて学んだ「精錡水（せいきすい）」という目薬の技術を得て販売し、大儲けするわけです。当時の清国の医療事情は悪かったからです。だから彼のことを国際商人第1号って言ったらいいんですね（図18）。

荒尾精はその彼を訪ねて行って、彼からいろいろ、当時の清国の様子を聞こうとしたのですが、吟香からは本気で清国を理解する気があるのかどうかということを問われ、何度目かに訪ねた時、手元にあったピストルで近くの花瓶を撃って、このぐらいの決意でありますと言って見せたのです。そこで、岸田吟香はそれではというわけで彼を受け入れてくれたという話が当時の刊行本に書かれてあるのです。これが本当なのかどうかは分からないのですが、そういう形で岸田吟香にお世話になったのです。これは、ちなみに岸田吟香像です。

息子さんは、岸田劉生と言いますが、この「麗子像」で有名です（図19）。その岸田劉生のお弟子さんが豊橋にある書店の、豊川堂（ほうせんどう）の高須さんです。高須さんがこの愛大（あいだい）のロゴを作ってくれたのです（図18、右）。だから僕は愛知大学のロゴが、今は簡単なアルファベットの「A」と、簡単な三角形で済ませていますけど、こちらのほうがはるかに歴史的なストーリーがあるという点で、このロゴを使ったほうが



図 19 岸田吟香マンガと息子劉生の麗子象

いいのではないかと考えているのです。
 ちょうど私が、書院、愛知大学史を考えているときに、新幹線の中で拾った漫画雑誌の中に岸田吟香が描かれていて、早速、出版社の講談社に連絡して、この1枚だけ、私の本の中に採用させてもらったということになります。

こうして大陸へ渡ったのが荒尾精であります。彼も、この後、巨漢になるのです。180センチの80何キロという体形で、「今西郷」と云われたりしました。このときは清国で3年ぐらい現地調査をやり、『清国通商綜覧』という厚い本を同僚の根津一（東亜同文書院の院長）に編集してもらい、日本へ戻ってきて出版し、これが大ヒットするわけでありました。その中に清国とどうやって商売をやっていけばよいのか、貿易をやっていけばよいのか、いろいろノウハウが書かれており、その後、日清貿易研究所という日清間貿易ビジネスマン養成所の最初の学校を創るわけです。日清戦争の少し前のことであります。この背景には、岸田吟香からいろいろ支援してもらった漢口を拠点にしたことがありました。上海では中国の実体は分からない。漢口へ行かないと分からないという吟香の教えで、漢口で薬屋と本屋を兼ねた漢口楽善堂を設置、そこへ日本から流れてきた若者たち。例えば会津藩ですと、官軍に完全にやり込められて会津藩出身者は、もうポストが上のほうにはない。また、西郷隆盛と一緒に戦った薩摩藩とか肥



図 20 荒尾精と漢口楽善堂の若者たち

後藩の連中も、もう先がない、というようなことで、皆、大陸へ渡ってくるわけです。そういう人たちを集めて貿易方法など清国のいろいろな情報を集めた。これはそのときのメンバーの貴重な写真だと思うのですが、これはちょっと勉強してる人にとってみると、非常にそうそうたる名前がズラッと上がってるわけでありました（図 20）。

こうして、きちんとしたビジネススクールとして日清貿易研究所が作られたわけです。ちょっと話が横道にそれるのですが、あとでもう1回します。この日清貿易研究所は貿易学の内容です。あくまでビジネススクールとして徹底した清語、中国語ですね。それから英語。関係した貿易実務に関する授業。それと商品見本館、陳列所の形で、そこでいろいろな取引を実習するというような形で教育を行ったのです（表 1）。

これが、日清貿易研究所の卒業生です（図

表 1 日清貿易研究所カリキュラム予定表

合計	体操	英語	漢語	清語	書字	法律学	経済学	商業算	作文	和漢文学	簿記学	支那商業	商業地理	英語学	清語学	科目	時間	日清貿易研究所卒業生第一年学科予定表 (一)	
																		前期	後期
40	6	1			1			3	2	1	2	3	3	6	12	前	後	前	後
43	6	1	1					3	2	1	2	3	3	6	12	前	後	前	後
44	6	1	6		1			2	1	1	2	3	3	6	12	前	後	前	後
48	6	1	8		1	1	1	2	1	1	2	3	3	6	12	前	後	前	後



図 21 日清貿易研究所の卒業生

21)。最初は 150 人ぐらい留学するのですが、途中で荒尾精は得られるはずであった資金の予定が得られなくなってしまって、金策にもものすごく苦勞するのですね。それを知った卒業生が辞めたり、あるいは上海で脚気にかかったりして、半分ぐらいが辞めてしまうのです。あと半分は残って、卒業まで頑張った。なかなか有能な人たちが、ここから誕生します。ところが、この直後に日清戦争が起こって、半分ぐらいの人が通訳として軍隊のほうに入れられてしまうのですね。そこで有能だったのに亡くなった人たちが結構いたから、荒尾はのちに彼らのために思って、京都東山へ引きこもってしまうのです。

6. 近衛篤磨公と東亜同文書院

これは、ちょうどその頃、今度は同時並行で場面が変わります。今度は近衛篤磨公が北海道へ行っています。明治 25 年です。彼はよくこうやって動くのです。函館からずーっと行って、この内陸部の一番中心、上川町ですね。当時、この辺ぐらいしか行けなかった(図 22)。明治 25 年の頃には、北海道には広大な農地があり、資源がある。これをなんとかしなくちゃいけない、いう発想も彼は持つわけです。これはのちに対露、ロシアとの関係でもって、北海道をどういうふうに扱っていったらいいのかというような構想とつながっていきます。

その後、明治 32 年になりますと、篤磨公は今度は世界一周するわけです(図 23)。これがまたすごいですね。ハワイへ行ってカリフ



図 22 篤磨の第 1 回目の北海道コース



図 23 篤磨の第 2 回世界旅行コース

オルニア、サンフランシスコからニューヨーク。そこから、イギリスロンドンへ、パリ、モスクワまで行っていますね。そのあと、マルセイユから帰って、コロンボ、シンガポール、サイゴンです。そして上海から清国の中へ入って日本へ帰ってきました。その最後の部分だけ拡大します。

これがそうです。マカオから香港そして、上海です。そこから南京へ行ってさらに武漢へ(図 24)。南京では当時の、この辺の両総督府、いくつかの地方を管理している総督府です。劉坤一(リュウ・コンイツ)という人



図 24 篤磨の華中訪問と北清訪問コース

に会って、近衛はヨーロッパからずーっと見てきた世界の中での清国の位置づけを説くわけです。それには、基本的には日本と清国との間で文化交流事業をもっと活発にしたほうがいいと提案するのです。この時代は日清戦争に日本が勝ったあとでしたから、なぜ清国が負けたかという、劉坤一も日本が非常に近代化を急いだ成果が出ているのだと理解していたのです。だから、その点で言うと、日本の戦前と清国の戦前を一緒に勉強することは非常にいいと。すると、じゃあ、「すぐ留学生を送る」と言い出したのです。もう1人、張之洞（チョウ・シドウ）という総督が武漢にいますが、篤麿公は張のほうがちょっと意識が低いかもしれないと書いてあります。しかし、留学生を送る熱意は十分で、彼からの同意も得て、南京に日清で共同の学校を作りましょうというのが約束されたのです。しかし、その学校ができる前に、張は息子をすぐ日本へ送りたいと言うので、篤麿は東京へ帰ったあと、すぐに張の息子を学習院へ受け入れています。そして、目白の邸宅の一部に建物を建てて、東京同文書院を作るわけです。

これが目白にできた東京同文書院でありませぬ（図 25）。これは、われわれ記念センターとしても、長いこと幻の学校でありました。よく分からなかったのです。

それを保坂さんという中央大学の附属高校の先生が研究をしていた。これ、なぜかという、中央大学の附属高校が高校の歴史を作るときに、保坂先生は学校から頼まれたけれ



図 25 東京同文書院校舎（目白）



図 26 講演する保坂氏(左)とセンター関係者と(右)

ど、学校の金でやるのはいやだから、自分でお金を出して興味のままにやったら、行きついたところが目白中学だったというのです。ところが、その目白中学の隣に東京同文書院という看板も一緒に立っていた。一体これは、なんだということで東京同文書院の研究に入られたのです。そういうお話をチラッと聞いたのが、この右から2番目の成瀬さよ子さん（図 26）という当時の愛知大学豊橋図書館の司書の方でして、書院史にも非常に興味持っておられた方です。その方を経て、講演に来て熱く語っていただいたのです。非常にシャイな方なもので、おしゃべりするのは、もう初めてで、あんまりやりたくないというようなことだったので、丁寧な講演でした。その功績が大きいということで東亜同文書院記念賞をのちにもらっていただいております。

この中で、非常に有能な当時のトップレベルの先生たちが清国から次々来る学生たちに教育をやっている。のちには、ベトナムから、当時の安南ですね。独立を目指す若者たちが、ここを拠点にしようというわけで東京同文書院に次々と来たのです。しかし、このことはフランス側には面白くなく、フランス植民地の反乱ですから。そこで、フランスと日本政府の協約とでも言いますか、フランスは安南、東南アジアを自分たちのものにするから、日本は朝鮮半島を自由にやってもいいような案がフランス側から提案されて、それに日本政府が乗ったために、ベトナムから来た留学生たちは一斉に追い払われてしまいました。噂が流れてきた情報ですと、帰国したら家族もろとも、みんな殺されてしまった、というよ

うな話を聞きます。その中でファン・ボイ・チャウがリーダーでありまして、その人がベトナムの戦後の独立の原点を作ったというので、ベトナム政府が、近年、この東京同文書院、そこでいろいろそれを支えた篤麿と、寮長でベトナム人の面倒をみた柏原文太郎や浅羽佐喜太郎などを顕彰しているのです。現在そういうようなところにつながっていくわけです。こういう話をすると時間が経ってしまっていますが。

そして、そのころ東亜会と同文会など日清戦争のあと、アジアをめぐるグループがいくつか出てくるわけですが、その中で主なグループは東亜会と同文会。東亜会は言論中心に政策論を語り。同文会はそこまで行かなくて、もう少し落ち着いて、2 国間の研究あるいは交流をするという考えの組織で、近衛篤麿はこの同文会のトップに立っているわけです。両組織ともお金がない。文科省にお金を要請したら、同じような団体が 2 つあって別々に払うのもなんだからと、一括合併をしてこいということで、2 つが合併したのです。そのときに同文会リーダーである篤麿公を代表に選んで東亜同文会を設立した。同文会はそのときの清国において、日本で言うと明治維新のようなことをやろうとしたトップのリーダーたち、康有為や梁啓超ら清国の近代化をめざし、清国から追われた有名な人がおります。そういう連中も加入させるべきだという主張をするのですけれど、近衛篤麿公はそういう清国の反政府的な連中は入れるべきでないと主張します。もし、入れてしまったら、東亜同文会そのものが清国から敵視されてしまうからだ。最後には、近衛篤麿がヨーロッパへ行き、非常にグローバルな視点から、東アジアを見ていたことが言えるかと思えます。

そして東京同文書院の話に入ってきますけれど、お配りしたプリントにグラフを書きました。当時、多くの清国学生が、東京

表2 東京同文書院と生徒数の変化

年	生徒数	年	生徒数
明治25年(1892)	12	大正10年(1920)	110
明治26年(1893)	13	大正11年(1921)	90
明治27年(1894)	14	大正12年(1922)	80
明治28年(1895)	15	大正13年(1923)	70
明治29年(1896)	16	大正14年(1924)	60
明治30年(1897)	17	大正15年(1925)	50
明治31年(1898)	18	大正16年(1926)	40
明治32年(1899)	19	大正17年(1927)	30
明治33年(1900)	20	大正18年(1928)	20
明治34年(1901)	21	大正19年(1929)	10
明治35年(1902)	22	大正20年(1930)	5
明治36年(1903)	23	大正21年(1931)	5
明治37年(1904)	24	大正22年(1932)	5
明治38年(1905)	25	大正23年(1933)	5
明治39年(1906)	26	大正24年(1934)	5
明治40年(1907)	27	大正25年(1935)	5
明治41年(1908)	28	大正26年(1936)	5
明治42年(1909)	29	大正27年(1937)	5
明治43年(1910)	30	大正28年(1938)	5
明治44年(1911)	31	大正29年(1939)	5
明治45年(1912)	32	大正30年(1940)	5
明治46年(1913)	33	大正31年(1941)	5
明治47年(1914)	34	大正32年(1942)	5
明治48年(1915)	35	大正33年(1943)	5
明治49年(1916)	36	大正34年(1944)	5
明治50年(1917)	37	大正35年(1945)	5
明治51年(1918)	38	大正36年(1946)	5
明治52年(1919)	39	大正37年(1947)	5
明治53年(1920)	40	大正38年(1948)	5
明治54年(1921)	41	大正39年(1949)	5
明治55年(1922)	42	大正40年(1950)	5
明治56年(1923)	43	大正41年(1951)	5
明治57年(1924)	44	大正42年(1952)	5
明治58年(1925)	45	大正43年(1953)	5
明治59年(1926)	46	大正44年(1954)	5
明治60年(1927)	47	大正45年(1955)	5
明治61年(1928)	48	大正46年(1956)	5
明治62年(1929)	49	大正47年(1957)	5
明治63年(1930)	50	大正48年(1958)	5
明治64年(1931)	51	大正49年(1959)	5
明治65年(1932)	52	大正50年(1960)	5
明治66年(1933)	53	大正51年(1961)	5
明治67年(1934)	54	大正52年(1962)	5
明治68年(1935)	55	大正53年(1963)	5
明治69年(1936)	56	大正54年(1964)	5
明治70年(1937)	57	大正55年(1965)	5
明治71年(1938)	58	大正56年(1966)	5
明治72年(1939)	59	大正57年(1967)	5
明治73年(1940)	60	大正58年(1968)	5
明治74年(1941)	61	大正59年(1969)	5
明治75年(1942)	62	大正60年(1970)	5
明治76年(1943)	63	大正61年(1971)	5
明治77年(1944)	64	大正62年(1972)	5
明治78年(1945)	65	大正63年(1973)	5
明治79年(1946)	66	大正64年(1974)	5
明治80年(1947)	67	大正65年(1975)	5
明治81年(1948)	68	大正66年(1976)	5
明治82年(1949)	69	大正67年(1977)	5
明治83年(1950)	70	大正68年(1978)	5
明治84年(1951)	71	大正69年(1979)	5
明治85年(1952)	72	大正70年(1980)	5
明治86年(1953)	73	大正71年(1981)	5
明治87年(1954)	74	大正72年(1982)	5
明治88年(1955)	75	大正73年(1983)	5
明治89年(1956)	76	大正74年(1984)	5
明治90年(1957)	77	大正75年(1985)	5
明治91年(1958)	78	大正76年(1986)	5
明治92年(1959)	79	大正77年(1987)	5
明治93年(1960)	80	大正78年(1988)	5
明治94年(1961)	81	大正79年(1989)	5
明治95年(1962)	82	大正80年(1990)	5
明治96年(1963)	83	大正81年(1991)	5
明治97年(1964)	84	大正82年(1992)	5
明治98年(1965)	85	大正83年(1993)	5
明治99年(1966)	86	大正84年(1994)	5
明治100年(1967)	87	大正85年(1995)	5

東京同文書院
 最初は目白中学校に併設したが、明治三十四年(一九〇二)二月、すなわち上海に東京同文書院を開設した年、赤坂藤町の仮校舎に移転、翌三十五年神田錦町に移し、同文会幹事長根津一が校長を兼じた。教科内容は高等専修学校等へ進む予備校として、日本語を主とし、算数・地理・歴史・物理化学を教へ、課程は二カ年であった。
 明治三十四年(一九〇二)から大正十一年(一九二一)まで二十余年間存続し、合計八百六十四名の卒業生を出している。年平均約四十名であるが、日中関係の悪化を反映し、列表の通り年によって増減がはなはだしい。すなわち明治四十一年(一九〇八)には日露戦争の影響で、東京同文書院に在籍する清国留学生は零である。

同文書院だけでなく柔道家で有名な嘉納治五郎とか、いろいろな学校も清国留学生を受け入れ、あのころは1万人ぐらいの留学生が東京 神田へ来ました。しかし、その後、21 カ条など日中関係が緊張するたびに学生数が増えたり減ったりして、最後は大正の後半には姿を消していつてしまうのです(表 2)。しかし、看板だけが東亜同文書院というのを残して、その後、書院の建物は目白中学に移管するのですけれど、看板だけは残した。ちょうどその写真を先ほどの保坂先生が見つけて、東京同文書院の研究に入るきっかけを作ってくれたわけです。

流れはこのような感じです。一番最初の原点は荒尾精と根津一、今日は、お話がほとんどできていませんが、その 2 人が日清貿易研究所を作り、途中ですぐ下に東亜会、同文会が合体して東亜同文会を作ったのです。一方、主に教育文化事業を中心に、近衛篤麿は南京

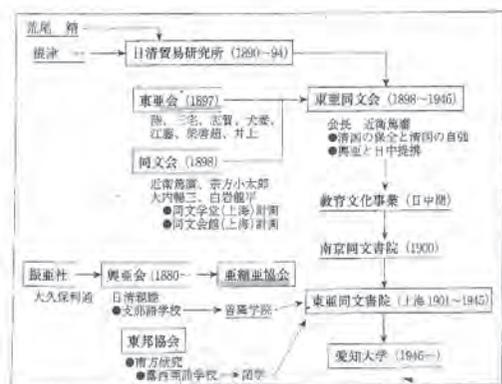


図 27 荒尾、根津、近衛から東亜同文会、東亜同文書院そして、愛知大学への系譜



図28 旧荒尾精宅(京都 東山)

同文書院を作って具体化しており、それが東亜同文書院に発展したという図であります。これも裏側のプリントに記載していますので、ご覧になってください(図27)。

もう一つ、先ほどの荒尾精は、近衛篤磨公があちこち動き回ってる最中に台湾で急に亡くなってしまったのです。38歳でした。東亜同文書院の院長をかつての同僚の根津一にまかせ、ずっとやってもらうこととなりますが、自分が今度は、日本と清国だけではなくて台湾が日本の植民地になりましたから、台湾はじめ、南方での貿易取引の拡大を目指したいと台湾へ渡った3日目、ペストに侵されて亡くなってしまい、日本中がびっくりしたわけです。その荒尾精の死を悼んで、のちに篤磨公が碑文を作った。これは京都の荒尾精の住んでおられた東山の一角です(図28)。そここのところに建てられたものです。これは大きな碑であったので、ほったらかしにしてあったから、苔むして永く読めなかったのですけれど、平成16年、直前ですね。金沢にお住まいの三田さんが、息子さんと一緒に拭き掃除で全部苔落としていただき、きれいにして読めるようにし(図29)、その平成16年に、みんなでここでお参りをしたのです。近衛篤磨公は、荒尾精を非常に高く評価していたんです。これはそのときの写真です(図30)。

7. 東亜同文会と東亜同文書院

図30はこの時代に集まった方々の写真で



図29 京都・荒尾精碑への参拝(1)。左が碑



図30 京都・荒尾精への参拝(2)。右は九烈士の墓

す。下のほうの写真にはもう1つ碑が建っています。これが九烈士の墓であります。荒尾としては、自分が日清貿易研究所で教えた有能な連中の中の9人が日清戦争で亡くなってしまった。それを悼んで、こういう碑を作ったのです。これが、今はもうほかの人のお宅になっていますけども、東方斎先生の庵。これは荒尾精の家があったところでもあります(前掲図28)。

こうして東亜同文書院が学校として具体化していくわけですが、その経営母体の話です。東亜同文会です。会長は近衛篤磨公であります。副会長、長岡護美。ほか幹事長、理事長、以下、ずっと並んでいます。この幹事長、理事長に見られたとおり、佐藤正さんという名前がみえます(表3)。今日はお孫さんの佐藤泰彦さんがお見えですね。上海中学を卒業された方です。佐藤正さんは、この佐藤泰彦さんの祖父です。佐藤正さんは日清戦争で活躍し、南京同文書院の院長役を最初やる予定で



図33 東京での東亜同文書院入学生の招見式



図34 図33の前列拡大図(中央近衛、左根津)

全国から集まって東京の、これは華族会館です。その前で集合したときの写真。その真ん中に、やっぱり近衛篤磨公が。根津院長が次(図34)。はい、拡大写真でありまして。このころまでは近衛さんは非常に元気でありました。はい。そしてそのあと、北海道へ再び陸路の旅をしています。これは日清戦争後、ロシアが南下してきて満州を占領してしまった。一次、二次、何回も撤退するという約束をしながら出ていかない。これらのことを踏まえて、近衛篤磨公は次第に対露戦略が非常に重要だとして、同盟会を作ったり、対ロシ



図35 篤磨による2回目の北海道コース



図36 退院時に撮られた篤磨一家

アの組織を作ったりとか、いろいろな対応をしていくわけです。それであらかじめ北海道の視察をしたわけです。(図35)

一方、海路も気になる。前に比べるとよくなったけれども、まだまだここは未開の地で、非常に有望であると。鉄道も少ししかないのです。まだまだ歩いて行くところが結構あったりしております。これもロシア側のシベリア鉄道、さらに東清鉄道が開通したときに北海道の持つ意味がもっと大きくなると考えたのです。そういう点でも北海道、早く整備した空間にしていく必要があるということを感じて主張するようになります。

そうして、その直後、これは篤磨公が左胸に痛みを感じて、調子が悪くなるのです。病院へ入ったり出たりするのです。かなり重症だったときに、一旦少し回復の兆しがあると、言われて自宅へ戻られたときの写真です。これが篤磨公の写っている最後の写真ですね

(図36)。一番左側が文磨さんで、前の奥さんのお子さんです。奥さんは彼を生んだあと亡くなったのです。右方が2番目の奥さんで亡くなった実さんの妹さんで、4人のお子さんをもうけました。このあと、篤磨公は入院し半年足らずで亡くなってしまいます。

今は、お墓が京都と日暮里にあります。こういうふうに祀られているわけです。これは孫文が篤磨公を惜しんで、お墓参りしたときの写真(図37)です。

これは歴代の東亜同文書院の院長です。根津一から最後、愛知大学を作った本間喜一



図 37 孫文による篤磨公への墓参



図 38 歴代の書院院長と左下は上海での文隆（前列右から2人目）を囲んだ会

で（図 38）。篤磨の息子の文麿公も総理大臣をやっているときに院長を兼任していました。しかし、上海の東亜同文書院に来たのは2回しかないのです。その息子の文隆はアメリカから帰ってきたあと、書院に事務員として手伝いに来た後、軍隊に入ります。これはアメリカから帰国後、上海の同文書院 30 周年を迎えたお祝いの会に出席したときの近衛文隆の写真です（図 38）。彼が上海に寄ったことは、いろいろな記録に残っていますが、彼自身の顔写真が写っているのが、見つからなく、これが一番いいかなと思って、これを持ってきました。

これが、書院その後の流れです。篤磨公が亡くなったあと、書院はずーっとこういう形で校舎を移転しますが、新キャンパスの 1920～1930 代が最盛期でした（図 39）。第 2 次上海事変で校舎が焼かれ、上海交通大学を借用、最後の年は富山県呉羽に分校をつくり、最後の新生を迎えます。そして終戦。戦争で学業中途になった学生たちの受入れ校として豊橋に愛知大学をつくりました。



図 39 東亜同文書院正門と本館（除家滙）

8. 愛知大学と近衛家

愛知大学はその後、同文書院を継承している部分としては、東亜同文会の図書や資産の受け入れ、近衛家を理事に迎えたわけですから。そして、これは、長いこと愛知大学の理事をやっておられた通隆さんの写真です（図 40）。一番上は、お正月にやります賀詞交換会で、あいさつをされたり談笑しているところです。こういった会はにぎりにぎしく行われておりました。



図 40 滙友会の賀詞交換会での通隆氏

これは、卒業生の中島寛司さんからご提供いただいた「近衛家三代をしのぶ会」の時の写真です（図 41）。私、これも参加したかったのですが、イギリス留学中のため参加できなかったのです。それから、毎年、東亜同文書院関係で功績のあった人を表彰するという東亜同文書院記念基金会授賞式があります。このときは、そのすぐ隣に女性がおられまして、工藤美代子さんという方で、近衛文麿公に関する書物（ノンフィクション）で受賞されました。文麿公は東京裁判の前日に自殺し



図41 「近衛家三代を偲ぶ会」

てしまった人ですけど、それをめぐって、いろいろ論評があります。本当はこうではなかったのかという作品を書かれて、授賞式の対象になったわけであります。すぐ隣、背の高い方が近衛通隆さんで愛知大学の理事であります(図41)。私もよく霞山ビルや文部省へ行ったのですが、文部省に向かう通りで背の高い人が「おう」と言って、あいさつしてくれたことが何度かあったことを思い出します。また、愛大卒業生たちとの定期的なゴルフの大会を年2回ぐらい、豊橋や豊川、新城へ来て、懇親会で盛り上がっていました。近衛家が、愛知大学の一画にあったということがお分かりいただけだと思います。

9. おわりに

近衛通隆さんは、数年前に亡くなられてしまいました。しかし、数日前に中日新聞を見ましたら、ニュー近衛さんの記事がありびっくりしたのですが、国際赤十字連盟の近衛会長が紹介されていました(図42)。お名前が忠輝さんです。文麿さんの娘さんの息子さんです。この方が近衛家をこれから引き継いでいくのだろうかというふうに思われます。また愛知大学との関係性が、もてる可能性もあるのではないかと思います。

いずれにしても近衛家とアジアそして愛知大学との関係は、こういう形でずっとつながってきていることをご理解いただければと思います。



図42 近衛忠輝氏記事